中京学院大学看護学部
紀要　第５巻第１号
2015年３月発行

〈研究報告〉

看護大学生の特性的自己効力感が職業的アイデンティティに与える影響
－学年間の比較－

An Influence in Students for Nurses of Occupational Identity and The special quality-like Self Efficacy
－Among Different Age Groups of Nursing Students－

高畑正子・大川明子[1)]・梅田徳男[2)]
Takahata Masako, Okawa Akiko and Umeda Tokuo

要　旨

看護大学生の特性的自己効力感が職業的アイデンティティに与える影響を明らかにするために，藤井らの「職業的アイデンティティ尺度」と成田らの「特性的自己効力感尺度」を用いて質問紙調査を実施した。その結果，以下のことが明らかになった．（１）職業的アイデンティティは１年生が最も高く，次いで４年生が高く，２・３年生は低かった．（２）職業的アイデンティティ尺度からは４因子が抽出された．すべての因子において１年生が高く、２・３年生は低く，４年生で再び高い傾向が見られた．（３）特性的自己効力感は１年生が最も高く，次いで４年生が高く，２年生は低かった．（４）特性的自己効力感尺度からは５因子が抽出された．２年生は５因子ともに低く，１年生および４年生は高かった．（５）職業的アイデンティティと特性的自己効力感の間には相関がみられた．学年比較すると職業的アイデンティティに影響を及ぼしている特性的自己効力感にはそれぞれ特徴が見られた．

キーワード：看護大学生，職業的アイデンティティ，特性的自己効力感

Ⅰ．はじめに

看護学生は看護という職業を選択した上で看護専門教育を受けているわけだが，看護学生の職業的アイデンティティが脆弱であることはすでに指摘されているところである．1985年以降，看護学生の職業的アイデンティティについては多くの研究結果が報告されてきた．それらによると，職業的アイデンティティは，入学直後の１年目が最も高く，２年目で大きく低下し，卒業直前で高くなるという傾向がある（藤縄・水野・谷，2003；波多野，1992；波多野・小野寺，1993；小藪・黒田・合田他，2007；野田・出口，2006；関口，2012；柴田・高橋・鹿村，2008；田川・宮原，2011；上山，2012）．また，職業同一性地位は，昔からなんとなく決めていたという「早期完了型」が多く，同時に「モラトリアム」の状態にある者も多い（柴田他，2008;上山，2009）．

そのような状況の中で，看護学生の職業的アイデンティティ形成に影響を与えている要

[1)] 名古屋大学大学院医学系研究科　[2)] 北里大学大学院医療系研究科/医療衛生学部

因もいくつか明らかになっている．なかでも授業や実習との関連においては，臨地実習での承認体験があること，実習における達成感が高いことは職業的アイデンティティの形成に強い関連があったと報告されている（阿部，1996；阿部・山口・滝島，1996；阿部，1997；辻・入山・高橋，2009；辻田・入山・高橋，2011）．また，自己概念の中心的要素である自己評価においては自尊感情（合田・黒田・小藪他，2011；高橋・古市・本江他，2012；山口，1996）や自己効力感（生田・長川・清水，2013）との関連についていくつか報告がある．自尊感情は自己をどうとらえるかに応じて規定され，自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことであり，自己のアイデンティティ形成に影響を与えるという（山本・松井・山城，1982）．

自己効力感とは，ある状況において必要な行動を自分で効果的に遂行できるという信念であり，困難や課題に直面した際に対処しようとする努力の程度に影響を与える（Bandura，A 1977/1979；成田・下仲・中里，1995）．成田（1995）は，課題や場面に特異的な形で行動に影響を及ぼす自己効力感とは別に，具体的な個々の課題や状況には依存せずに，より長期的に，より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感を特性的自己効力感と命名している．この特性的自己効力感は人の行動を予測し，制御するうえで重要と考えられており，特性的自己効力感が強いほどより高い目標を自分のために設定して挑戦し，それに対するコミットメントも確固たるものになるという．このことから，特性的自己効力感が高ければ看護への職業的アイデンティティが高まると推察される．これまでに，谷山・甲斐（2013）は実習後は実習前より自己効力感が向上し，看護に対する内的動機と自己効力感の間には有意な関連が認められたと報告している．また，生田（2013）によると看護大学１年生の職業的アイデンティティと自己効力感は相関性があり，さらに落合・紙屋・パリダ（2006）は看護実践家による授業によって看護学生の職業的アイデンティティと自己効力感が高まったと述べている．一方で，更家・子安・池田（2011）によると看護系大学生の特性的自己効力感には学年進行に伴う変化はなく，また，江口・寺澤（2005）は看護学生の自己効力感は入学時は高いがそれ以降は低かったと報告している．

以上のように職業的アイデンティティと自己効力感とは関連があるという報告もあるが，対象がある学年だけに限定されていることも多く，一時的，断片的であることから必ずしも看護学生全体の職業的アイデンティティとの関連を反映しているとは言い難い．また，看護学生の特性的自己効力感は実習や授業によって高められたという報告もあるが，学年進行による変化はなかったという報告もあり，その特徴も明らかになっていない．

本研究では，看護大学生の職業的アイデンティティおよび特性的自己効力感の学年比較を行い，その特徴を明らかにする．その上で，看護大学生の特性的自己効力感が職業的アイデンティティに与える影響を明らかにするために，その第一段階として看護大学生1～4年生を対象に横断的に調査を行った．

Ⅱ．用語の定義

職業的アイデンティティ：職業と自己との関連性の中で，職業を通しての自分らしさを確かめ，どのように成長していきたいかという自己意識．

特性的自己効力感：個人が必要な行動を自分で効果的に遂行できるという可能性の認知で，より一般化した日常場面における行動に影響を与える信念.

Ⅲ．研究方法

１．研究目的

看護大学生１～４年生の特性的自己効力感が職業的アイデンティティに与える影響を明らかにする.

２．調査内容

本研究は質問紙調査である．次の２つの尺度を用いた.

（１）藤井・野々村・鈴木他（2002）が作成した「看護学生用職業的アイデンティティ尺度」を使用した．この尺度の「看護職を選択したことへの自負」「看護観の確立」「必要とされることへの自負」「社会貢献の志向」の４つの下位尺度の上位５項目，計20項目を採用した．この尺度は「そう思う」から「そう思わない」の５段階尺度で，それぞれ５点から１点に評点化し，得点が高いほど職業的アイデンティティが高いことを示す.

（２）成田ら（1995）が作成した「特性的自己効力感尺度」を使用した．この尺度は１因子構造からなる計23項目の尺度で，「そう思う」から「そう思わない」の５段階尺度である．項目の中には逆転項目があり，それらに対しては逆転処理をした後にそれぞれ５点から１点に評点化した．得点が高いほど自己効力感が高いことを示す.

（３）個人属性.

３．調査方法

対象者に，研究の趣旨，調査対象，調査方法，倫理的配慮を明記した用紙を用いて口頭で説明をした．調査票は留め置き法で回収し，調査票への回答をもって研究への同意とみなした．また，回答の意思がない場合は白紙のまま回収箱に入れることができるようにした.

４．調査対象

看護大学の１～４年生320名

５．調査期間

2014年４月５日～４月30日

６．分析方法

（１）「職業的アイデンティティ尺度」および「特性的自己効力感尺度」の合計得点の学年の特徴を比較するために平均値の差の検定を一元配置分散分析を用いて行った.

（２）「職業的アイデンティティ尺度」および「特性的自己効力感尺度」についてそれぞれ因子分析を行った．因子分析は標本相関係数を基に主因子解を求め，固有値１以上を基準に因子数を定めて，バリマックス回転を実施した．さらに，質問紙の信頼性を検討するために信頼性分析を行い，クロンバックα係数を算出した.

（３）「職業的アイデンティティ尺度」および「特性的自己効力感尺度」の因子得点の学年の特徴を比較するために，平均値の差の検定を一元配置分散分析を用いて行った.

（４）職業的アイデンティティの各因子と特性的自己効力感合計得点との関連を見るためにピアソンの相関係数を求めた.

（５）特性的自己効力感の各因子が職業的アイデンティティの各因子に与えている影響をみるために，重回帰分析を行った．さらに，学年ごとの比較を行った.

平均値の差の検定，因子分析，信頼性分析，相関係数の算出，重回帰分析にはSPSS 19.0 for Windowsを用いた.

Ⅳ．倫理的配慮

対象者に対する研究への協力依頼は書面および口頭で行い，研究への参加は自由意志であり，無記名とした．また，研究結果は統計的に処理し，個人を特定することはできないこと，研究に協力しない場合でも成績には一切影響がないこと，秘密保持のために厳重に保管・管理すること，研究終了後は破棄すること，研究結果の公表には対象者が特定できない配慮をすることを対象者に伝え，厳守した．

Ⅴ．結果

1．対象

回収数は232部で，１年生82名（学年回収率97.6%），２年生37名（同45.1%），３年生41名（同48.8%），４年生72名（同84.7%）であった．

2．「職業的アイデンティティ尺度」合計得点の学年間の比較

１年生が最も高く，２・３・４年生に比べて有意差が認められた（$P<.01$）．次いで４年生が高く，２・３年生に比べて有意差が認められた（$P<.01$）（表１）．

表１　職業的アイデンティティ尺度および特性的自己効力感尺度合計得点の学年ごとの比較

	職業的アイデンティティ尺度			特性的自己効力感尺度		
	平均値	SD		平均値	SD	
全体	75.59	12.56		68.95	11.4	
1年生	81.78	9.74		71.19	11.03	*
2年生	67.85	12.78	* * *	62.66	10.52	
3年生	68.70	11.20	*	66.46	10.42	*
4年生	76.11	12.28		71.00	11.75	

＊$P<.01$

3．「職業的アイデンティティ尺度」の共通因子

主因子分析法を用いて因子分析した結果，４因子が抽出された．バリマックス回転後.45以上の因子負荷量があった項目を，その最大因子負荷量により各因子に分類した（表２）．

表2　職業的アイデンティティ尺度項目の因子分析

因子名	質問項目	1	2	3	4
必要とされることへの自負	私は看護職として患者に必要とされていると思う	**.882**	.136	.174	.103
	私は看護職として、これまでも、これからも、多くの人に必要とされていると思う	**.869**	.186	.182	.066
	私は看護職として、医療チームの一員として、今後ますます必要とされると思う	**.852**	.172	.188	.156
	私は看護職として医療の世界で不可欠な存在であると思っている	**.776**	.226	.148	.085
	私は看護職として、背景に独自の学問体系をもっている	**.544**	.256	.076	.227
看護に対する自分の考え	自分がどんな看護をしたいかはっきりしている	.144	**.719**	.183	.213
	私は自分らしい看護をしていくことができると思う	.198	**.708**	.185	.163
	自分がどんな看護者になりたいかはっきりしている	.147	**.697**	.215	.333
	将来、自分らしい看護ができるようになると思う	.217	**.691**	.152	.158
	私は看護のありかたについて、自分なりの考えを持っている	.215	**.575**	.178	.093
	私は看護職を選択したことはよかったと思う	.238	**.454**	.310	.433
社会への貢献の志向	私は看護職として患者の願いに応えたいと思っている	.122	.165	**.841**	.170
	私は看護職として、社会に貢献していきたい	.167	.155	**.798**	.246
	私は看護職として、患者に貢献していきたい	.158	.133	**.766**	.160
	私は看護職として医療の発展に貢献していきたい	.187	.319	**.653**	.189
	私は看護職として、看護の世界の発展に貢献していきたい	.166	.305	**.590**	.160
看護職を選択したことへの自負	私は看護職以外の仕事は考えられない	.122	.114	.199	**.724**
	私は看護職につくことが自分らしい生き方だと思う	.177	.401	.230	**.676**
	私は看護職を生涯続けようと思っている	.105	.269	.219	**.637**
	私は看護職を志す学生であると他人に誇りを持っていることができる	.196	.444	.324	**.452**
因子寄与		3.61	3.43	3.34	2.27
累積寄与率		18.07	35.20	51.91	63.25

主因子分析法・バリマックス回転

各因子それぞれについて，因子負荷量の高い項目を参考に命名を行った．

第１因子は，「私は看護職として患者に必要とされていると思う」「私は看護職として，これまでも，これからも，多くの人に必要とされていると思う」「私は看護職として，医療チームの一員として，今後ますます必要とされると思う」という項目で高い因子負荷量を示しており，看護職として患者や医療チームに必要とされることへの自負に関する項目からなっており，『必要とされることへの自負』と命名した．

第２因子は，「自分がどんな看護をしたいかはっきりしている」「私は自分らしい看護をしていくことができると思う」「自分がどんな看護者になりたいかはっきりしている」という項目で高い因子負荷量を示しており，自分なりの看護への思いに関する項目からなっており，『看護に対する自分の考え』と命名した．

第３因子は，「私は看護職として患者の願いに応えたいと思っている」「私は看護職として，社会に貢献していきたい」「私は看護職として，患者に貢献していきたい」という項目で高い因子負荷量を示しており，看護職として患者や社会への貢献に関する項目からなっており，『社会への貢献の志向』と命名した．

第４因子は，「私は看護職以外の仕事は考えられない」「私は看護職につくことが自分らしい生き方だと思う」「私は看護職を生涯続けようと思っている」という項目で高い因子負荷量を示しており，看護職を選択した意志，看護職を選択したことへの自負に関する項目からなっており，『看護職を選択したことへの自負』と命名した．

４つの因子を下位尺度として信頼性分析を行い，クロンバックのα係数を算出した結果，「第１因子」.916，「第２因子」.876，「第３因子」.886，「第４因子」.819であった．

４．「職業的アイデンティティ尺度」の因子ごとの学年間の比較

結果を表３に示す．第１因子『必要とされることへの自負』は１年生が最も高く，２・３年生に比べて有意差がみられた（$P<.01$）．また，４年生は２年生に比べて有意に高かった（$P<.01$）．

第２因子『看護に対する自分の考え』は１年生が最も高く，２・３・４年生に比べて有意差がみられた（$P<.01$）．また，４年生は２・３年生に比べて有意に高かった（$P<.01$）．

第３因子『社会への貢献の志向』は１年生が最も高く，２・３年生に比べて有意差がみられた（$P<.01$）．また，４年生は２年生に比べて有意に高かった（$P<.01$）．

表３　職業的アイデンティティの下位尺度の学年ごとの比較

	必要とされることへの自負		看護に対する自分の考え		社会への貢献の志向		看護職を選択したことへの自負	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
全体	16.96	4.79	21.8	4.42	21.74	3.23	15.00	3.37
1年生	18.67	3.98	24.13	3.22	22.66	2.98	16.29	2.84
2年生	14.54	5.14	19.08	3.86	20.33	3.51	13.50	3.45
3年生	15.24	4.73	19.23	4.28	20.68	2.99	13.71	3.51
4年生	17.27	4.72	21.94	4.46	22.01	3.13	15.03	3.27

＊$P<.01$

第４因子『看護職を選択したことへの自負』は１年生が最も高く，２・３年生に比べて有意差がみられた（$P<.01$）.

５.「特性的自己効力感尺度」合計得点の学年間の比較

１年生が最も高く，２年生に比べて有意差が認められた（$P<.01$）．次いで４年生が高く，２年生に比べて有意差が認められた（$P<.01$）（表１）.

６.「特性的自己効力感尺度」の共通因子

「特性的自己効力感尺度」の項目について，主因子分析法を用いて因子分析した結果，５因子が抽出された．バリマックス回転後.39以上の因子負荷量があった項目を，その最大因子負荷量により各因子に分類した（表４）.

各因子それぞれについて，因子負荷量の高い項目を参考に命名を行った．なお，逆転項目はその文言を逆転させて表す.

第１因子は，「すぐにあきらめない」「何かを終える前にあきらめない」「思いがけない問題が起こった時，それをうまく処理できる」という項目で高い因子負荷量を示しており，目の前の問題に対してあきらめずにうまく処理できるという思いに関する項目からなっており，『うまくできると思う可能性の認知』と命名した.

第２因子は，「私は自分から友達を作るのがうまい」「新しい友達を作るのが苦手ではない」「人の集まりの中で，うまく振舞える」という項目で高い因子負荷量を示しており，知らない人とも友達になろう，苦手なことでも人間関係を作るために積極的に行動しよう

表4　特性的自己効力感尺度項目の因子分析　　(*)項目は逆転項目

因子名	質問項目	1	2	3	4	5	6
うまくできると思う可能性の認知	すぐにあきらめてしまう(*)	**.756**	.100	.201	.077	.207	-.166
	何かを終える前にあきらめてしまう(*)	**.616**	.111	.232	.198	.304	-.087
	思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できない(*)	**.603**	.326	-.038	.063	.114	.275
	新しいことをはじめようと決めても、出だしでつまづくとすぐにあきらめてしまう(*)	**.577**	.083	.245	.261	.069	-.125
	人生で起きる問題の多くは処理できるとは思えない(*)	**.564**	.095	.066	.057	.090	.060
	難しそうなことは、新たに学ぼうと思わない(*)	**.560**	.007	.122	.326	-.061	.075
	重要な目標を決めても、めったに成功しない(*)	**.473**	.304	-.044	.151	.233	-.029
努力しようとする意志	私は自分から友達を作るのがうまい	.008	**.751**	.056	-.033	.108	.120
	新しい友達を作るのが苦手だ(*)	.253	**.692**	-.080	.190	-.038	-.169
	人の集まりの中では、うまく振る舞えない(*)	.399	**.513**	-.100	.152	.032	-.053
	友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならばすぐに止めてしまう(*)	.317	**.504**	.121	.241	-.003	-.101
	会いたい人を見かけたら、向こうから来るのを待たないでその人の所へ行く	-.001	**.478**	.188	-.018	.130	-.120
	最初は友達になる気がしない人でも、すぐにあきらめないで友達になろうとする	-.037	**.432**	.381	.064	.208	-.111
最後まであきらめない意志	初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける	.308	.041	**.625**	-.075	-.061	.151
	面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる	.046	-.028	**.613**	.251	.023	.007
	失敗すると一生懸命やろうと思う	.267	.070	**.393**	.084	.165	.118
困難に立ち向かおうとする意志	困難に出会うのを避ける(*)	.230	.134	.092	**.750**	.104	.196
	非常にややこしく見えることには、手を出そうと思わない(*)	.271	.098	.111	**.623**	.042	-.033
行動を起こす意志	しなければならないことがあっても、なかなかとりかからない(*)	.253	.062	-.027	.179	**.678**	-.067
	何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる	.125	.160	.395	-.056	**.499**	.249
	自分が立てた計画はうまくできる自信がある	.256	.327	.102	-.141	**.421**	.335
因子寄与		3.35	2.55	1.61	1.46	1.23	0.64
累積寄与率		14.59	25.65	32.70	39.02	44.3	47.1

主因子分析法・バリマックス回転

と努力する意志に関する項目からなっており，『努力しようとする意志』と命名した．

第３因子は，「初めはうまくいかない仕事でも，できるまでやり続ける」「面白くないことをする時でも，それが終わるまでがんばる」「失敗すると一生懸命やろうと思う」という項目で高い因子負荷量を示しており，うまくいかなくても失敗しても一生懸命にやり続けようとする意志に関する項目からなっており，『最後まであきらめない意志』と命名した．

第４因子は，「困難に出会うのを避けない」「非常にややこしく見えることにも，手をだそうと思う」という項目で高い因子負荷量を示しており，困難や難しいと思えることに対しても立ち向かおうとする意志に関する項目からなっており，『困難に立ち向かおうとする意志』と命名した．

第５因子は，「しなければならないことがあれば，すぐにとりかかる」「何かをしようと思ったら，すぐにとりかかる」「自分が立てた計画はうまくできる自信がある」という項目で高い因子負荷量を示しており，やらなければならないことに取り組もうとする意志，計画に沿ってやっていこうとする意志に関する項目からなっており，『行動を起こす意志』と命名した．

５つの因子を下位尺度として信頼性分析を行い，クロンバックのα係数を算出した結果，「第１因子」.835，「第２因子」.762，「第３因子」.605，「第４因子」.698，「第５因子」.614であった．

７．「特性的自己効力感尺度」の因子ごとの学年間の比較

結果を表５に示す．第１因子『うまくできると思う可能性の認知』は４年生が最も高く，２年生に比べて有意差がみられた（$P<.01$）．第２因子『努力しようとする意志』は４年生が最も高く，２年生に比べて有意差がみられた（$P<.01$）．

第３因子『最後まであきらめない意志』は１年生が最も高かったが，有意差はみられなかった．

第４因子『困難に立ち向かおうとする意志』は４年生が最も高かったが，有意差はみられなかった．

第５因子『行動を起こす意志』は１年生が最も高く，２・３・４年生に比べて有意差がみられた（$P<.01$）．また，４年生は２年生に比べて有意に高かった（$P<.01$）．

８．職業的アイデンティティと特性的自己効力感の関連

（１）職業的アイデンティティの各因子と特性的自己効力感合計得点との関連

職業的アイデンティティの各因子と特性的自己効力感の合計得点の関連を見るためにピ

表5　特性的自己効力感の下位尺度の学年ごとの比較

	うまくできると思う可能性の認知			努力しようとする意志			最後まであきらめない意志		困難に立ち向かおうとする意志		行動を起こす意志		
	平均値	SD		平均値	SD		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
全体	21.76	5.04		19.36	4.82		11.04	1.99	5.19	1.41	8.52	2.27	
1年生	21.94	5.44		19.64	4.24		11.28	2.24	5.29	1.73	9.55	2.15	
2年生	20.08	3.70		17.36	5.03		10.57	1.97	4.78	1.62	7.16	2.10	*
3年生	20.63	5.19	*	18.90	4.49	*	10.88	1.94	5.07	1.69	7.90	2.07	*
4年生	23.03	4.76		20.29	5.26		11.10	1.71	5.35	1.75	8.40	2.09	*

＊$P<.01$

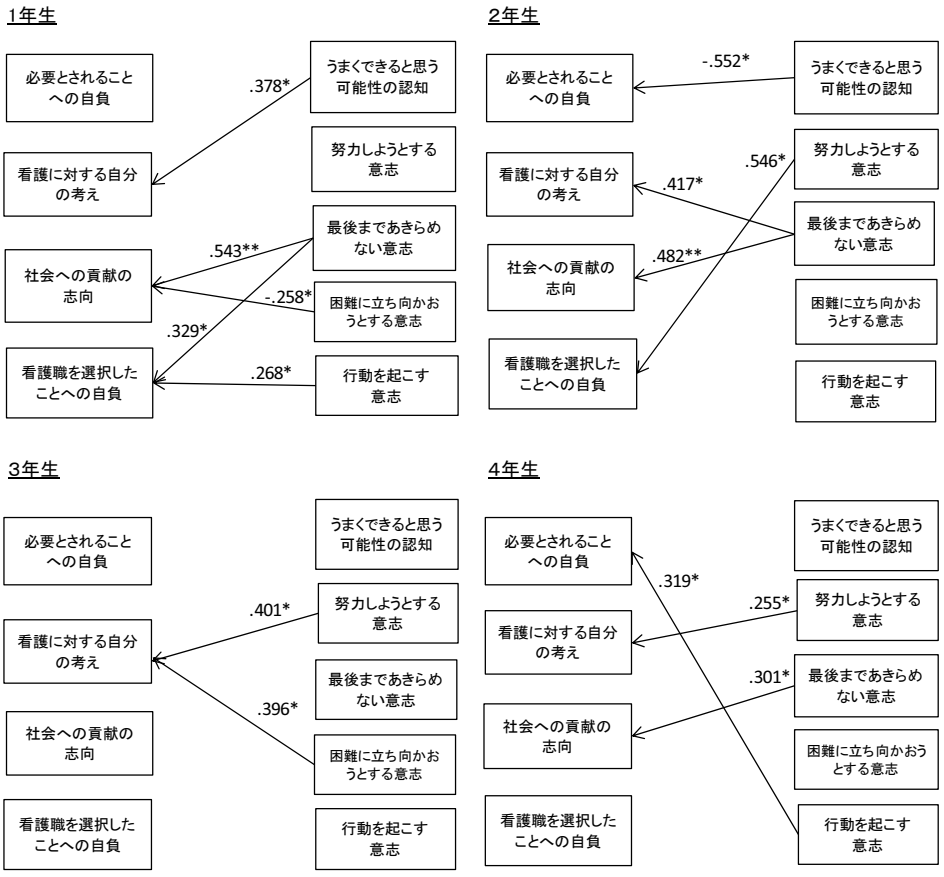
アソンの相関係数を求めた（表６）．その結果，特性的自己効力感と職業的アイデンティティの『看護職を選択したことへの自負』および『看護に対する自分の考え』との間にはそれぞれやや強い相関が認められた（R＝.41～.54，P<.01）．また，『必要とされることへの自負』および『社会への貢献の志向』との間には弱い相関が認められた（R＝.29～.37，P<.01）．

（２）特性的自己効力感が職業的アイデンティティに与える影響，学年ごとの比較

職業的アイデンティティの４因子を従属変数，特性的自己効力感の５因子を独立変数とする重回帰分析を行った．結果を学年ごとの図に示した（図）．１年生は『看護に対する自分の考え』に『うまくできると思う可能性の認知（β＝.378)』が，『社会への貢献の志向』に『最後まであきらめない意志（β＝

表6　職業的アイデンティティの各因子と特性的自己効力感との相関関係　（ピアソンの相関係数）　＊＊P<.01

	必要とされることへの自負	看護に対する自分の考え	社会への貢献の志向	看護職を選択したことへの自負	特性的自己効力感
必要とされることへの自負	－	.47 ＊＊	.41 ＊＊	.44 ＊＊	.29 ＊＊
看護に対する自分の考え		－	.50 ＊＊	.63 ＊＊	.54 ＊＊
社会への貢献の志向			－	.58 ＊＊	.37 ＊＊
看護職を選択したことへの自負				－	.41 ＊＊
特性的自己効力感					－



＊＊P<.01　＊P<.05

図　特性的自己効力感が職業的アイデンティティに与えている影響（因子ごと）-学年ごとの比較

.543)』が影響を及ぼしていた．２年生は『必要とされることへの自負』に『うまくできると思う可能性の認知（β＝-.552)』が負の影響を及ぼし，『社会への貢献の志向』に『最後まであきらめない意志（β＝.482)』が，『看護職を選択したことへの自負』に『努力しようとする意志（β＝.546)』が影響を及ぼしていた．３年生は『看護に対する自分の考え』に『努力しようとする意志（β＝.401)』，『困難に立ち向かおうとする意志（β＝.396)』が影響を及ぼしていた．４年生は『必要とされることへの自負』に『行動を起こす意志（β＝.319)』が，『社会への貢献の志向』に『最後まであきらめない意志（β＝.301)』が影響を及ぼしていた．

Ⅵ．考察

１．職業的アイデンティティについて

職業的アイデンティティは，入学直後の１年生が最も高く，２年生が最も低く，４年生が再び高いという結果であった．これは，これまでに報告されている看護学生の職業的アイデンティティの傾向と同じ結果であった（藤縄他，2003；波多野，1992；波多野他，1993；小藪他，2007；野田他，2006；関口，2012；柴田他，2008；田川他，2011；上山，2012）．また，因子別にみた結果も４因子とも１年生が最も高く，２年生が最も低く，３年生でやや高くなり，４年生が再び高いという結果であった．特に４年生は『必要とされることへの自負』『社会への貢献の志向』で２年生より有意に高く，『看護に対する自分の考え』では２・３年生より有意に高かった．看護学生１年目は看護師志望理由である職業的魅力（河村・藤田・種池他，2000）や看護師に対する憧れや興味という職業選択動機（松下・柴田，2004）が影響して職業的アイデンティティが高まっているという報告もある．本調査も入学直後の４月に行ったものであり，１年生は看護大学に入学できたという思いが強く結果に影響していたと推察される．その後，２年生となりより専門的になっていく授業を通して，憧れや興味ではなく現実的な専門職業としての教育を受ける中で職業的アイデンティティは低下する．しかし，３年生になると少し高くなり，４年生になるとさらに高くなる．特に，職業的アイデンティティの下位尺度である『必要とされることへの自負』『社会への貢献の志向』『看護に対する自分の考え』は高くなってきている．これは，学年が進行するにつれて専門的な学習や体験を重ねていく中で，看護職を現実的に捉えられるようになり，看護という職業と自分の将来像を重ねることで，職業的アイデンティティが高くなっていくのだと考えられる．山内・松本・山本（2009）も，看護学生の職業的アイデンティティの形成過程は看護職が自分に向いているかどうかという自分探しであると述べている．その一方で，４年生になっても『看護職を選択したことへの自負』についてはいまだ揺らいでいる現状も見えた．佐藤（1998）は，青年期において同一化できる自己発達をすることで職業と自己の関連性を見つけ，職業決定を中核とした社会的役割を獲得し，職業発達の基礎がなされると述べている．Erik H.Erikson. & Joan M.Erikuson・村瀬孝雄・近藤邦夫（1998/2001）によると，心理・社会的危機とアイデンティティ形成についての社会的発達段階において，青年期の心理・社会的危機は「アイデンティティ対アイデンティティの拡散」であり，青年期における同一化ができる自己発達を得る中で，社

会的には職業と自己の関連性を見つけて，職業的アイデンティティが確立されていくという．看護学生はまさに青年期にあたる．入学時にすでに看護という職業を選択しているとはいえ，看護学生は看護について学ぶ中でアイデンティティストレス状態に陥いる恐れもあり，この状態をうまく乗り越えなければ職業的アイデンティティの拡散を引き起こすことにもなりかねないといえる．このような職業的アイデンティティが形成されていない状況で卒業して看護職に就いても，職業的アイデンティティの模索状態は続き，ひいては拡散すなわち離職へとつながることも懸念される．したがって，看護学生のうちに職業的アイデンティティが形成されることが望まれる．そして，そのための教育的支援の方法の検討が必要であるといえる．

２．特性的自己効力感について

特性的自己効力感は１年生が最も高く，２・３年生は低く，４年生が再び高いという結果であった．因子別にみると，２年生は５因子ともに低かった．『行動を起こす意志』は１年生が他学年に比べて有意に高かった．しかし，『うまくできると思う可能性の認知』『努力しようとする意志』『困難に立ち向かおうとする意志』は４年生が高かった．

自己効力感とは，ある状況において必要な行動を自分で効果的に遂行できるという信念である（A.バンデュラ，1979/成田，1998）．自己効力感は発達的に変化するものであり，たとえば小学生は一般に自己の能力を驚くほど過大評価する傾向があり，その後現実的な自己の能力評価になっていくことが知られている．そして，特性的自己効力感は過去の成功と失敗の経験から形成され，未経験の新しい状況下でも適応的に処理できるという自分への期待に影響するという（成田他，1995）．１年生は大学入学という達成感や今後への期待などが自己への過大な評価となっていると推測される．しかし，２年生になり新しい環境や多くの専門的科目の履修において「自分にできるのだろうか」という結果予期や，「どうやって行けばうまくできるのだろうか」という効力予期が低くなっていることが伺われた．「できる」という確信の程度である自己効力の強さが，困難な状況に立ち向かうか否かを決め，対処しようとする努力に影響するが，課題に対処できなかった経験は「自分にはできない」という思い込みにつながる．さらに，自己効力感が低い状態で困難な状況や新たな状況に直面すると，考え方がゆらぎ，自分を見失ってしまうことにもなりかねないと考える．看護大学生にとって，２年目は一つの局面ともいえる．

４年生になると，それまでの授業や実習の中で多くの失敗や成功を重ね，達成感を得る中で「こうすれば自分でもできる」という自信が持てるようになり，効力予期が高まっているのだと考えられる．この効力予期は「遂行行動の達成」「代理体験」「言語的説得」「情動的喚起」の４つの情報源に影響を受けるとされている（A.バンデュラ，1979/成田，1998）．「遂行行動の達成」は成功体験を重ねることであり，自己効力感はいったん確立すると他の場面でも「やってみたらできるだろう」という自信につながり，より高い目標へと挑戦していく．しかし，失敗体験を繰り返すと無力感，あるいは自尊感情を傷つけ，脅威をもたらすことにもなるという．したがって，４年間を通して低いレベルから徐々に高いレベルの目標を設定し，成功体験を積み重ねていくことが望まれる．「代理体験」はモ

デルの成功を代理的に体験することである．看護学生は同じ目標をもつ者同士が共に授業や実習を受けている．その中で，他の学生の学習の方法，体験談や問題解決の方法を共に学ぶことができるような，すなわちグループ・ダイナミクスが奏功するようなかかわり，学生同士がお互いにモデルになれるような関係性が構築されるとよいと考えられる．「言語的説得」は，自分の行動や目標の達成について他者からの承認や賞賛を受けることによって自信を得ることである．学生は，授業や実習を乗り越えていく過程で，自分の未熟さを受け入れつつ，時には達成感を得，いくつかの承認体験をし，否定感情から肯定感情へ移行していく．そして，状況を肯定的にとらえられるようになり，自己の評価と能力についての自尊感情を高め，自分でもできるかもしれないという自己効力感が高まっていくのだと推測される．したがって，学生の行動や努力に対する教師からの承認や称賛が大切だと言える．「情動的喚起」は生理的な反応や情動的な反応の体験が影響を与えるということである．授業や実習では緊張や不安，戸惑いが失敗体験に繋がらないように，緊張を和らげる支援やリラックスした環境を整えることが必要になってくる．

３．特性的自己効力感が職業的アイデンティティに与える影響

特性的自己効力感が職業的アイデンティティに与える影響を学年ごとに見た結果，かなりばらつきがみられた．特に，『うまくできると思う可能性の認知』は１年生では『看護に対する自分の考え』にプラスの影響を与えていたが，２年生では『必要とされることへの自負』にマイナスの影響を与えていたことが特徴的であった．しかし，学年によって関連する因子とその影響の強さに違いは見られたものの自己効力感は職業的アイデンティティに影響を及ぼしていることがわかった．ゆえに，自己効力感が高くなれば職業的アイデンティティの形成が促進されることが推察できる．今後は，学年の特徴や学習進度に合わせた自己効力感を高めるかかわりについて探る必要があると考えられる．

今回は学年別の比較を行ったが，４月の調査であり，２年生といえども１年が経過した時期であり，調査時期が結果に影響を及ぼしていることは否めない．また，対象者の回収率にばらつきがあること，今回１回だけの調査結果であることが研究の限界である．今後の課題は，職業的アイデンティティおよび自己効力感に影響を及ぼしている要因を探ることであり，職業的アイデンティティおよび自己効力感を高める教育的関わりを模索していくことである．

Ⅶ．結論

（１）職業的アイデンティティは１年生が最も高く，次いで４年生が高く，２・３年生は低かった．（２）職業的アイデンティティ尺度からは４因子が抽出された．すべての因子において１年生が高く，２・３年生は低く，４年生で再び高い傾向が見られた．（３）特性的自己効力感は１年生が最も高く，次いで４年生が高く，２年生は低かった．（４）特性的自己効力感尺度からは５因子が抽出された．２年生は５因子ともに低く，１年生および４年生は高かった．（５）職業的アイデンティティと特性的自己効力感の間には相関がみられた．学年ごとに比較すると職業的アイデンティティに影響を及ぼしている特性的自己効力感にはそれぞれ特徴が見られた．

謝辞

今回の調査にご協力いただいた看護大学生の皆様に深謝いたします.

【文　献】

Bandura, A.（1977）/原野広太郎監訳（1979）. 社会的学習理論－人間理解と教育の基礎, 金子書房, 東京

阿部裕子, 山口由子, 滝島紀子（1996）. 臨床実習が看護学生の自尊感情と職業的同一性形成に及ぼす影響. 神奈川県立衛生短期大学紀要, 28, 8-13

阿部裕子（1996）. 臨床実習が看護学生の自尊感情と職業的同一性形成に及ぼす影響について　その1. 日本看護研究学会雑誌, 19(3), 73-74

阿部裕子（1997）. 看護学生の自尊感情及び職業的同一性形成に対する臨床実習の影響. 日本看護研究学会雑誌, 20(2), 64-65

合田友美, 黒田裕子, 小薮智子, 新見明子（2011）. 看護学生の自尊感情と職業的アイデンティティとの関連から考える教育的支援. 川崎医療短期大学紀要, 31, 75-81

江口瞳, 寺澤孝文（2005）. 一般性自己効力感と看護実践に対する自己効力感の学年間の相違. 広島国際大学看護学ジャーナル, 3, 13-24

Erik H.Erikson. &Joan M.Erikuson（1998）/村瀬孝雄・近藤邦夫訳（2001）. ライフサイクル　その完結. 東京：みすず書房

波多野梗子（1992）. 看護学生の熟達化と職業的同一性. 日本看護学教育学会誌, 2(2), 26-27

波多野梗子, 小野寺杜紀（1993）. 看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化. 日本看護研究学会雑誌, 16(4), 21-28

藤井恭子, 野々村典子, 鈴木純恵, 澤田雄二, 石川演美, 長谷龍太郎, 山元由美子, 大橋ゆかり, 岩井浩一, N.D.パリー, 才津芳昭, 梅山宏之, 紙屋克子, 落合幸子（2002）. 医療系学生における職業的アイデンティティの分析. 茨城県立医療大学紀要, 7, 131-142

藤縄理, 水野智子, 谷合義（2003）. 学生の専門職アイデンティティ確立を援助するための教育についての検討. 埼玉県立大学紀要, 5, 105-110

生田奈美可, 長川トミヱ, 清水佑子, 浅井美穂（2013）. 看護大学生の職業的アイデンティティの形成に関する研究　入学後間もない時期の構造と特徴. 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 6(1), 11-19

河村彰美, 藤田淳子, 種池礼子, 中川雅子（2000）. 看護学生の看護婦志望理由・学習進度が看護婦の職業的アイデンティティ形成に及ぼす影響. 看護展望, 25(9), 105-110

小藪智子, 黒田裕子, 合田友, 新見明子（2007）. 看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究（第二報）　経年的変化から考える教育的支援. 川崎医療短期大学紀要, 27, 25-29

松下由美子, 柴田久美子（2004）. 新卒看護師の早期退職にかかわる要因の検討　職業選択動機と入職半年後の環境要因を中心に. 山梨県立看護大学紀要, 6, 65-72

成田健一, 下仲順子, 中里克治（1995）特性的自己効力感尺度の検討－生涯発達的利用の可能性を探る. 教育心理学研究, 43, 306-314

野田貴代, 出口睦雄（2006）. 看護短期大学生の職業的アイデンティティと関連要因. 愛知きわみ看護短期大学紀要, 1, 15-24

落合幸子, 紙屋克子, マイマイティ　パリダ,

落合亮太，本多陽子，藤井恭子（2006）．エキスパート・モデルが看護学生の職業的アイデンティティに及ぼす影響．茨城県立医療大学紀要，11，71-78

更家慧，子安君枝，池田千秋，松田知恵，森岡郁晴，鈴木幸子（2011）．A看護系大学生の職業コミットメント，自己効力感及び抑うつ傾向の関連．日本医学看護学教育学会誌，20，3-7

佐藤昇子（1998）．看護職のキャリア形成に関する問題とその概念枠組み．インターナショナル・ナーシング・レビュー，21(2)，55-69

関口恵子（2012）．３年課程の看護学生におけるアイデンティティの形成　職業的アイデンティティとの関連に注目して．埼玉医科大学短期大学紀要，23，31-43

柴田和恵，高橋ゆかり，鹿村眞理子（2008）．看護学生の援助規範意識と職業的アイデンティティ　１年生入学時と３年生の比較．日本看護学会論文集，看護総合，39，78-80

田川奈保子，宮原春美（2011）．助産学生の入学動機と職業的アイデンティティ．日本看護学会論文集，母性看護，41，54-57

高橋ゆかり，古市清美，本江朝美，鹿村眞理子（2012）．看護学生におけるストレス対処能力と抑うつ傾向の心理社会的要因との関連　職業的アイデンティティの視点から．日本看護学会論文集，　精神看護，42，214-217

谷山牧，甲斐一郎（2013）．看護学生を対象とした臨地実習自己効力感尺度の作成と評価．日本看護学教育学会誌，22(3)，13-21

辻大介，入山茂美，高橋美和（2009）．フィリピンの看護学生における臨床実習達成感と職業的アイデンティティとの関連．国際保健医療，24(3)，244-245

辻大介，入山茂美，高橋美和（2011）．看護学生の実習達成感と職業的アイデンティティの関連．看護教育，52(1)，42-46

上山和子（2009）．看護学生の進路選択要因が職業的アイデンティティ形成に及ぼす影響とその対処法．インターナショナルNursing Care Research，8(3)，113-122

上山和子（2012）．看護学生の職業的アイデンティティ形成要因と生涯発達としての子育て観の変化（第2報）2年次学生の調査．インターナショナルNursing Care Research，11(4)，163-172

山口由子（1996）．臨床実習が看護学生の自尊感情と職業的同一性形成に及ぼす影響　その２．日本看護研究学会雑誌，19(3)，74-75

山本真理子，松井豊，山城由紀子（1982）．認知された自己の諸側面の構造．教育心理学研究，30，64-68

山内栄子，松本葉子，山本雅子（2009）．現代の看護系大学生の学生生活における職業的アイデンティティの形成過程．日本看護学教育学会誌，18(3)，11-24